

序文

このオルガン協奏曲は、力強い保続音 D と大きなクレシェンドで始まる。私はこの冒頭の音量の増大と上昇を、さらに拡大し延長したい衝動に駆られた。また、徐々に膨んでいくこのニ短調の和音は、R. ワグナーの『ラインの黄金』の冒頭の変ホ長調の和音の先駆けのごとく、はるか昔にほとんど忘れ去られた和音のように私には思えた。今日の大きなコンサート用グランドピアノは、最も静かな ppp から最も強い fff に至る表現を可能にする。いくつかの小節で原曲に付加された導入部、そしてカデンツァ (ad libitum*の所) を除き、私は広い音域を利用することによって、オルガンの力強さをできる限り模倣しつつ、厳密かつ正確に原曲を遵守した。しかし全く正確な編曲を好む人にも満足がいくよう、私は最後のページで、原曲に即して忠実に編曲されたオルガン協奏曲の冒頭の部分を再現した。

*ここでは「省略化」という意味

フリーデマン・バッハのオルガン協奏曲の根底にあるものは嵐、より明確に言うならば、苦悩と憧れの情熱によってかき乱された心の、魂の嵐だ。この雰囲気はカデンツァへと続く。

無論、この魂の嵐はまだリストの『嵐』(巡礼の年)ではないので、際限なく奔放に荒れ狂い、すべての掟や規範を破る嵐ではない。このオルガン協奏曲はまだリストのような近代の巨匠の魂の嵐ではなく、古代の巨匠の心の嵐を表している。

嵐は逆巻き、轟くとはいえども、古代の堅苦しさや陰鬱を定める掟はいつそう嵐の力を制御し、嵐にまだ確かな特定の方向性を定めている。

不運でむら気なフリーデマン・バッハのこのオルガン協奏曲は、おそらく彼自身の安らぐことのない魂を反映しており、ベートーフェン、ワグナー、そしてリストの創造した素晴らしい嵐の幻想の、いわば偉大な先駆けである、と私は考える。

F. バッハのこの嵐の幻影のただ中に、静かで夢のような花、ラルゴは咲いている。それは身のすくむような断崖の合間に咲く俗世を離れた「エーデルワイス」のようだ。ここで私は次のリスト的な表現を用いたい。《二つの断崖絶壁の合間に咲く一輪の花》(ベートーフェン、ソナタ 嬰ハ短調) ラルゴをよりやわらかに、より切なる想いを込めて演奏するほど、いつそう感動的な効果があらわれる。そしてまさにラルゴが、星のない恐ろしい嵐の夜の真っ只中で、太陽の光のような温かさと慰めをもたらすのだ。

Ph. エマニュエル・バッハの華々しい作品を考慮に入れても、現代の感覚や思考において、フリーデマン・バッハは、偉大な J. ルードヴィッヒ・クレーブスを含むすべての同時代人々の先駆けである。私は新しい校訂版をここに公開する。そして、J. S. バッハの長男であるヴィルヘルム・フリーデマン・バッハが、この校訂版によって、さらに多くの友人を得ること心から望んでいる。

ウィーン 1906 年 11 月 18 日

アウグスト・シュトラール